【姫路市立神南中学校】の取組
個々に「ゆだねる」ＩＣＴ活用の研究
～学校生活の効率化と生徒の主体性の育成に向けて～

１　取組の背景

本校は生徒数 179 名、教職員数 20 名、各クラスは 30 名程度（特別支援学級は６名）であり、「なりたい自分を見つけ　主体的に学び続ける生徒の育成」を学校教育目標として掲げている。

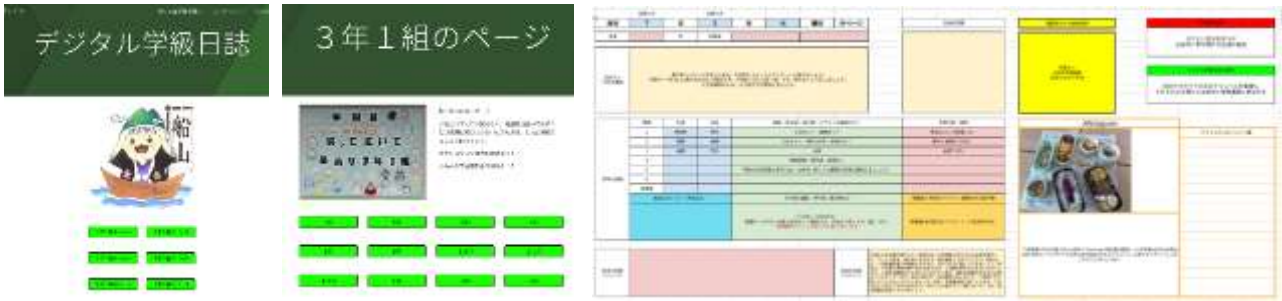
生徒に１人１台の学習者用端末（以下、端末）が配付されて以来、本校では、「まずは生徒に使わせてみる、指導はその都度」を合言葉に、生徒が日常的に端末を机上に置いて、個々のタイミングで使用することが当たり前になることを目指してきた。

令和５年度に研究協力校に指定されたことをきっかけに、本校が重点目標に掲げる「個別最適な学びと協働的な学びの推奨」に向けて、ＩＣＴをどう活用していけばよいかについての協議を始めた。

現在は、姫路市教育委員会の指導主事や、週３日派遣されるＩＣＴ支援員のサポートを受けながら、全職員で「学校生活の効率化と生徒の主体性の育成に向けて」をテーマに協議し、取組を進めている。

２　主な取組

（１）デジタル学級日誌



（※）　上図は Google サイトを利用して、全生徒と保護者が全学級のデジタル学級日誌（右図）を閲覧できるようにしている様子

本校では、今年度より Google スプレッドシート（以下、スプレッドシート）を活用したデジタル学級日誌を導入し、生徒の学習意欲の向上と学校生活全体の効率化を目指している。このデジタル学級日誌では、時間割、教師からの連絡、課題や小テストの有無、評価についてなど、学習に必要な情報を一元化し、生徒だけでなく保護者も共有できるようになっている。

デジタル学級日誌の活用による、学校生活の流れ

登校後	時間割・朝の提出物・担任からのメッセージ等を各自で確認
朝学活	教師が電子黒板に投影し、視覚的に１日の生活の流れを再確認
授業後	教科係の生徒が授業のまとめ・課題・反省等を入力し、クラスメイトと共有
終学活	入力された情報をもとに、授業の評価・翌日の連絡・１日の反省の確認
帰宅後	生徒（欠席した生徒を含む）や保護者が、必要に応じて連絡等の確認

デジタル学級日誌を活用することで、生徒が自分のタイミングで学校の連絡を見たり、日番や教科係が自分のタイミングで連絡や評価を書いたりできる。生徒に「ゆだねる」部分を増やすことで、生徒が自ら考えて行動する機会をつくり、生徒の自主性を高めようとしている。また、保護者や欠席した生徒がデジタル学級日誌を見て、いつでも連絡事項を確認できるという点から、教師側の保護者連絡に要する負担が軽減され、業務改善にもつながることを期待している。

（２）スタディサプリの活用

本校では、令和４年度から従来のドリル学習ソフトを変更して、スタディサプリを導入し、「ひめじ学びタイム」などの時間に生徒に取り組ませている。スタディサプリ導入の背景には、生徒一人ひとりの学習状況に合わせた個別最適な学びの実現と、不登校生徒への学習機会の提供を目指すという２つの目的がある。

スタディサプリでは、動画コンテンツ視聴による理解の促進と、練習問題を解くことによる知識の定着という２つの側面から学習を進めることができ、本校生徒は、自分のペースとスタイルに合わせて主体的に学習を進めている。その中で、教科や学年によって学習スタイルに顕著な特徴が見られた。社会科では、授業で理解できなかった部分を動画視聴で補い、より深く知識を定着させようとする傾向が強く、理科や英語科では、授業で出された課題を解くために、動画で解説を確認しながら練習問題に取り組むといった学習方法を選択する生徒が多くなっている。また、学年ごとの特徴としては、第１学年は他の学年と比較して教科の難易度が低いことから、基礎を固めることを重視し、多くの練習問題に取り組む傾向が見られた。

活用については、より有効かつ実践的な取組を行うために、東京から株式会社リクルート公教育支援推進部の方々を招いて、生徒向けの研修会も実施した。研修会では、スタディサプリの機能を最大限に活用する方法や、自分にあった学習法を見つけるためのヒントなどを助言いただき、生徒同士がスタディサプリの活用方法について意見交換を行う機会を設けることで、生徒の更なる主体的な学習を促した。

スタディサプリの活用による、成果と課題

成果	生徒は、自分のペースで、興味のある分野から学習を進めることができた。
	生徒の「自ら課題を設定して学びを調節する力」を養うことにつながった。
	教師は、印刷や採点に費やす時間を削減し、より学習指導に専念できた。
	学校を欠席した生徒も、家庭学習を通じて学習の遅れを軽減できた。
課題	生徒は、自身に必要なコンテンツを選択し学習計画を立てる必要がある。
	教師は、コンテンツを十分に理解し、活用するための準備が必要になる。

（３）その他の取組

個別最適な学びに向けた取組

① 学習者用デジタル教科書の活用
- 授業中に音読練習時間の設定【英語科】

② Google Classroom（以下、Classroom）の活用（教科担当がClassroomを作成）
- 授業内容を補ったり、深めたりする動画（実験・作図）や資料の提示【理科】
- 過去に作成したテストや高校入試問題の紹介【社会科・数学科】

③ Googleスライド（以下、スライド）の活用
- 実物が用意できないものを画面上で模擬操作（イオンの結びつき等）【理科】

④ Googleドキュメント（以下、ドキュメント）の音声入力機能の活用
- 音声入力機能を利用した発音チェック【英語科】

協働的な学びに向けた取組

① Classroomの活用（教科担当や部活動担当がClassroomを作成）
- 実技の様子をペアで撮影し、全体でアドバイスし合う活動【体育科・音楽科】
- パフォーマンステストを動画で撮影し、全体で評価を決める活動【英語科】
- 各自が考えた練習メニューや試合等の反省を掲載する【野球部】

② スプレッドシートの活用
- 道徳の授業（発表する代わりに意見やふり返りを入力する）
- 学級活動（学級開き、行事ごとの学級スローガンの作成）

③ スライドの活用
- 実験の様子を記録して考察を発表【理科】
- 調べ学習、プレゼンテーション、探究活動等【総合的な学習の時間】

④ 業務改善に繋がるスキルを紹介し合う共有のGoogleドライブを作成【教職員】
- 単語登録機能の活用（全校生徒名簿を登録）
- ショートカットキーやファンクションキーの活用（Snipping Tool、入力変換）

３　変容

（１）生徒の変容：主体的な学び手へ

デジタル学級日誌やスタディサプリの導入により、生徒たちの生活スタイルは大きく変化した。デジタル学級日誌では、いつでもどこでも情報にアクセスできる環境を提供したことで、生徒たちが自ら進んで内容を確認するようになった。従来の形では、教師の指示を待って行動することが中心であったが、デジタル学級日誌の導入によって、教師が教室にいなくても生徒が自発的に行動する姿が見られるなど、受動的な生活スタイルから主体的な生活スタイルへと変化が見られつつある。また、欠席した生徒は、デジタル学級日誌を通じて授業の進度を確認したり、スタディサプリでの学習を利用して授業の遅れを取り戻そうとしたりしている。

ＩＣＴを活用したグループワークやプレゼンテーション活動の継続的な指導では、生徒は表現力を向上させている。例えば、探究活動における発表の場面では、自分たちで図や表を用いた資料を作成するなど、情報を整理し、分かりやすく伝えるために様々な工夫を

凝らしている。これらの活動を通して、生徒は、単に知識を習得するだけでなく、それを活用し、思考力・判断力・表現力を培い、発信する力を養っているといえる。

（２）教職員の変容：多様な指導法の導入と業務の効率化

ＩＣＴを活用した指導の導入は、教師の働き方にも大きな変化をもたらした。従来の一斉授業中心の授業から、生徒一人ひとりの個性や学習状況に合わせた多様な指導法が可能になった。例えば、Google フォームを活用した小テストの結果を分析し、個別の学習指導に活かすといったことを行っている。また、スタディサプリの学習履歴データに基づき、生徒の理解度を把握し、個別指導に活かすといったことも行っている。

デジタル学級日誌は、教師の業務の効率化にも大きく貢献している。あらかじめ生徒に伝えたい情報をデジタル学級日誌に入力しておくことで、ホームルームで連絡事項の伝達に要する時間は大幅に短縮された。また、欠席生徒やその保護者への連絡も容易になり、学校と家庭との連携が強化された。

教師の授業以外の負担が軽減された結果、教師はより多くの時間を生徒との直接的なコミュニケーションや、教材研究に充てることができるようになり、より質の高い教育活動を行うことができるようになったといえる。

（３）学校の変容：学習環境の変革と学校全体の活性化

デジタル学級日誌やスタディサプリの導入により、学校全体の雰囲気が大きく変わった。生徒は、自ら進んで学習に取り組み、教職員は、生徒一人ひとりの成長をサポートすることに意識をおくようになった。また、保護者は、デジタル学級日誌を通じて、子どもの学習生活をリアルタイムで確認したり、学習状況を把握しやすくなったりした。

さらに、デジタル学級日誌の機能改善や、スタディサプリの活用方法について、教職員が意見交換を行うなど、学校全体でＩＣＴを活用した教育について積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。

これらの変化は、学校全体の活性化にもつながっており、生徒は、自ら学び、成長しようとする意欲を高め、教職員は、より効果的な教育活動に励むようになってきている。また、保護者も学校との連携を深め、子どもの教育に関心をもち、共に子どもの成長を支援するようになってきているといえる。

４　今後の展望

今後、本校では、今まで以上に生徒一人ひとりが自分の得意な分野で能力を発揮できるような環境を整備し、学校全体を活性化させていきたいと考える。具体的には、ＩＣＴを活用して、生徒が自らコンテンツを制作し、発信できる機会を増やし、生徒が「創り手」となることを目指したい。また、教師が生徒一人ひとりと向き合い、その子に合った指導を行う時間を確保することで、生徒の個々の成長を支援していきたい。そして、ＩＣＴ活用における「ゆだねる」ことの重要性を再認識し、生徒の自主性を尊重しながら、新たな「ゆだねる」を模索していきたい。